

学校点描

先週からインフルエンザB型で
欠席する生徒が増加しました。

《M中学校》

NO. 12 H28. 3. 1

担当：教頭

先週の金曜日からインフルエンザで欠席する生徒が増加してきました。今回は、なかなか熱が上がらないため、医療機関にかかって検査しても、すぐにインフルエンザの判定がでないケースが多かったようです。数回、病院に行ってもようやくインフルエンザB型の反応が出たという報告が多く入ります。土日の連休がすぐに入ったため、爆発的な猛威を振るうことはなく、今は収束に向かっていきます。

昼休みに、2年生のM・Mさんが、プリントを先生方の机上に上げていきます。「卒業式の装飾用の花が足りないので、朝読書の時間に協力してもらいたいです。」と教えてくれました。実に丁寧なきれいな字で書いてあります。「M・Mさんが書いたの」と聞くと、「いいえ、S・Kさんが書いてくれました。」と答えてくれました。それぞれの得意なところを活かしながら、来年卒業生になる2年生の生徒たちががんばってくれています。

出生（しゅっしょう）

僕は、6か月から3歳になるまでのまだ言葉が話せないとき、何度も高い熱がでました。それは、夜中だったので、近所の人に電話をお願いすると迷惑をかけるので、父が医者に行き「子どもを診てほしい」と紙に書いて頼んだこともたびたびあったそうです。

愛知県中学1年 山崎 一（はじめ）

ある教育団体が、この作文を書いた中学生の家を尋ね、親と子どもの関係について話をしてほしいとお願いしたことが新聞に載っていました。出生についての作文のようです。

M・Mさんのプリント配付と同じ日に、今度は同じ2年生のS・Kさんが広報委員会で作成した生徒会誌『BEST 304号』を先生方の机上に配ってくれました。『新入生オリエンテーションの模様』や、『雪に親しむ会で先生方の普段見せない姿を見た事件？』について等、それぞれの記事を読んでいると生徒の側からみた物の見方や考え方に触れることができます。『体調管理をしっかりと』なんて見出しもあります。インフルエンザに対して、生徒たち自身も注意喚起の必要性を感じていることがわかります。

わたしは、生け花については、まったくの門外漢ではありますが、どうも、生け花の世界に「出生（しゅっしょう）」ということばがあるということ、ある書物から教えてもらいました。それぞれの花材がもつ、その花独特の特性のことをそういうのだと言います。

生け花について、お詳しい方には当たり前の話になるかもしれませんが、花を生けるときは、竹のようにまっすぐなものはまっすぐに力強い性質が最大限に引き立つようにしなければいけません。その一方で、コスモスのように茎が細く、風に揺れるような花を生けるときは、その性質を最大限に引き出して、可憐さをよりやさしく見せなくてはならないそうです。

この生け花の出生（しゅっしょう）を、中学生で見ると、体を動かすことが得意だったり、動くのが苦手だが文章を書くのが得意だったり、そういうものと重なる気になります。

テスト期間の最中でも、勉強の合間を縫って生徒会誌の記事を集め記事にする生徒がいたり、それを配り歩く生徒がいたり、その内容を読んで花の装飾に必要な花紙をもらいに職員室に来る生徒がいたり、学校とは、生け花のように、生徒1人ひとりが、その良さを一生懸命輝かそうとする場であるべきです。

自分の得意技が生かされる学校では、生徒は生き生きしていますし、美しく見えます。

花の持つ“出生（しゅっしょう）”が生かされて最もきれいに見えるのに似ています。

一方で、大人の私たちは、一人一人の性質を見抜いて、最大限に引き出す技が必要です。

引き出すとはどんなことをすることでしょう。

花は決して美しく咲いているだけではありません。地に張る根は、しっかり風雨に負けず地面を掴んでいます。苦しさや厳しさが一方であってこそ、本当の美しさが滲みでるものなのでしょう。

わが子に苦勞をかけさせたくないという気持ちは、どこの保護者だって思っています。でも、そればかりでは、きっとその子本来の美しさは咲き誇れないでしょう。

18世紀の思想家ルソーは、その著書『エミール』の中で『子供をダメにするのは簡単だ。欲しがるものを際限なく与えればよい』と言っています。出生についての話でした。

出生とは、自分でえらぶことはできないものです。だから、その家庭、その家庭の苦勞や、他の家庭との違いをしっかりと話をし、家族の苦勞話なんかをしながら、子どもにはしっかりした根を張らせることが大切なのでしょう。

お母さんの耳になりたい

愛知県中学1年

山崎 一

僕は6か月から3歳になるまでのまだ言葉が話せない時、何度も高い熱が出ました。それは、夜中だったので、近所の人に電話をお願いすると迷惑をかけるので、父が医者に行き「子どもを診てほしい」と紙に書いて頼んだこともたびたびあったそうです。

僕の両親は、聴覚がないのです。

でも、僕は父と母が自分を育てるときにどんな苦勞があったかは、知っているつもりです。僕は、たとえ耳が不自由でも、今の両親を一番尊敬しています。（以下省略）

親という花、それ自身が一生懸命自分らしく咲き誇っていれば・・・

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp